

崎山治男

2005年に立命館大学産業社会学部赴任。専門は、サービス産業で〈望まれる〉感情を演じることが持つ効果を分析する感情社会学や、〈私〉がなぜ存在するのか？といった自己論、社会がもたらす病理が本当に〈社会〉のせいなのかを分析する社会問題論など。社会学の「何でも屋」をめざす。

1. 専門演習の目標

まず第一には、〈社会学〉という問いの構えについて、日常生活でのさまざまな体験を元にしなが、身近な事柄を元にしつつ取得すること。第二には、それを可能にするための先行研究のレビュー、資料の整理、調査といった大学ないしその〈後〉にも役に立つスキルを取得すること。第三には、「演習」を通して〈大学〉でのオン・オフでの学びをもおこなうこと。これらを通して、最終的には卒業論文の作成を目指す。

2. 専門演習で扱う課題と内容

これまで述べてきたように、社会学という問いの構えを身につけるため、さまざまな日常生活を素材としなが、それを社会学の理論と照らし合わせて、理論と現実のどこが一致して、どこが一致しないのか？が内容のメインとなる。

そのため、特に特定の課題と内容を設定するというよりは、日常生活での何気ない疑問から出発し、なぜ・いかに私たちが相互行為を行ってしまっているのか？ということについて、原理的な問いについて考察を深めてゆきたい。

なお、担当者の専門領域は上記した通りであるが、演習参加者は必ずしもこの領域にしばられることなく、自由に日常生活での体験を〈社会学〉する、という形となる。

3. 授業の進め方・内容

- 3 回生前期：専門となる基礎文献の購読
- 3 回生後期：各自のテーマに沿った自由報告
- 4 回生前期：同上
- 4 回生後期：卒業論文に向けた文章作成指導

4. 必要とする知識

特に必ず必要とする知識はない。社会学の基礎知識と日常生活についてさまざまな引き出しがあることが望ましい。

5. 関連する分野・科目・知識

基礎社会学、社会学説史、社会病理学、自己論など。

6. テキスト・参考書・機材（受講生が標準的に持つもの）

井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』有斐閣

7. 独自に付加する選考方法

特になし

8. 受講生に望むこと

日常生活への疑問・好奇心と、それを論理的に考えてみたいという構え。「さまざまな範囲」での演習への〈適切〉な期待。